



## ✧ 研究会報告 ✧

漢陽大学校東アジア文化研究所主催国際会議

# 日常性へのまなざし

## 「グローバル時代と東アジアの文化表象」Ⅲ

佐野 賢治 (非文字資料研究センター 研究員)

韓国の漢陽大学校人文科学大学東アジア研究所は、2012年9月に国から重点研究所として指定され、東アジアの日常・生活文化表象の昨日と今日を多角的に検討する「グローバル時代と東アジアの文化表象」というテーマで開所以来共同研究を進めてきた。その第3回目の国際学術会議が2014年3月29日(土)漢陽大学校で開催された。折からの桜の開花の中で今回は、韓国と日本の研究者4人ずつが相互にこのテーマに対して話題を提供しコメントをつけるという形で進められた。韓国と中国の研究者による会議は別の時期に開催されるという。今回の会議次第、論題と発表者、コメンテーターは以下のとおりであった。

開会挨拶 シン・ソンゴン研究所長

<第1部>司会： 全 遇容(漢陽大)

発表① 「もののけ姫」にみる日本文化

佐野 賢治(神奈川大)

討論者： 朴 一昊(誠信女子大)

発表② 近代日本正月行事における旧暦と新暦

- 西宮神社十日戎を事例に -

平山 升(九州産業大)

討論者： 金 昌民(全州大)

発表③ 伊勢神宮式年遷宮と近代天皇の表象

朴 奎泰(漢陽大)

討論者： 曹 圭憲(祥明大)

<第2部>司会： 睦 秀炫(ソウル大)

発表④ 日本の精神論と桜の表象

裴 寛紋(翰林大)

討論者： 徐 東周(梨花女子大)

発表⑤ 日本茶論に見る「日本的なもの」

- 千利休・岡倉天心・柳宗悦を中心に -

李 京僖(漢陽大)

討論者： 泉 千春(西京大)

<第3部> 司会： 吳 秀卿(漢陽大)

発表⑥ 東アジアにおける「稲むら」の文化表象的意義

伊藤 好英(慶応義塾大)

討論者： 朴 鉉烈(中央大)

発表⑦ 「ごはん」をめぐる労働の政治

- 朝鮮人労働者の食生活と労働効率を中心に -

韓 惠仁(成均館大)

討論者： 崔 鐘吉(東義大)

発表⑧ 平壤の都市建設と首都としての再編

- 近現代建築の歴史的な読み解きを中心に -

谷川 竜一(京都市大)

討論者： 韓 東洙(漢陽大)

<総合討論> 司会： 朴 贊勝(漢陽大)

この会議を開催する趣旨は、グローバル時代における今日、東アジアの文化現象、中でも庶民の日常生活にみられる文化表象の背景を探り、その関係性を鳥瞰し、その将来を展望することにあるという。東アジアにおける、政治・経済上の現状、混乱を考えると遠回りのようでも庶民の日常性への相互理解がこうした齟齬を改善する最良の方法であると改めて思いながら私はそれぞれの発表を聞いた。同時通訳を使つての発表は8題目であったが、討論者の事前に準備したコメントの内容は深く詳細であり、会場との質疑応答も的を射た実質的なものであり一日の会議の終了時にはどっと疲れが出たがそれは充実感を伴うものであった。

さて、会議の基調となる話題提供をして欲しいと頼まれた私は宮崎駿監督のアニメ作品「もののけ姫」(1997)



会後の主催者・発表者・討論者の記念撮影

を題材に、その背景に照葉樹林文化における樹霊信仰、非定住稲作農耕民文化、職人論などを織り込み、「縄文」と「弥生」、「ヤマト」と「エミシ」（アイヌ）、「職人」と「農民」、「山人」と「常民」、「漂泊」と「定住」など、このアニメ映画が日本民俗文化の構造にかかわる重要な課題を広汎に再考させてくれることをまず指摘した。日本の民俗伝承において、漁民は七浦を潤す鯨に戒名をつけ過去帳に載せ、墓を作ってその霊を供養し、女人たちは2月8日、日頃世話になった裁縫の師匠、針親に対してだけでなく豆腐に針を刺して感謝の意を表し、正月には農具も人とともに歳を取るなど、生物・無生物を問わずその存在を擬人化して霊格を認める事例は豊富であり、宮崎監督率いるスタジオ・ジブリのアニメ作品の底流には、まさに日本的アニミズムの伝統、八百万の神の考え方が流れている。今日一神教の国々も含め漫画、アニメを中心に日本文化を紹介するイベントが定期的で開催され国際的にも高く評価される理由の一つにアニメーション（animation）の原義、映像に登場するすべての霊的・物質的存在に命が与えられ両義的な“モノ”として扱われていることを主題にして話を進めた。「もののけ姫」は、日本の民俗文化が培ってきた自然—人—カミの三者の共生・共存関係を集約しており、まさに世界に向けて自然環境保全へのメッセージとなるのではと結んだ。

この発表に対して、討論者の朴一昊教授は6項目にわたりA4判2頁に及ぶ詳細な質問文を用意され、遠慮されながら口頭で質問された。その場で即答できないほど深く複雑な内容も含まれ、私は一般論で言い逃れ恐縮した。事前に朴教授と質疑を往復する時間的余裕があればと思った次第である。このように各発表に対する討論者の質問は、事前の熱心な読み込みをうかがわせるに十分なものであった。また、韓国側研究者の発表は日本への留学経験を有する先生方が多いとはいえ、日本側研究者の私たちから見ても課題の選択、調査研究視角の斬新さ、そこから導かれる結論と、すでに国を超えての日本研究の水準の高まり、その深化に内心驚かされたのである。

日本側研究者の発表は、阪神電車の開業・営業政策と西宮十日戎の旧暦から新暦への改変関係を論じた九産大・平山升、にいなめ研究会以降、近年の研究成果を加味しての穀霊信仰の再考を説く慶応大・伊藤好英、韓国側も調査の困難性を伴う北朝鮮・平壤の近代都市計画を現地踏査で報告した京大・谷川竜一の3氏が行った。韓国・中国が正月を旧暦（農暦）で行う背景、平壤の都市計画の実施プロセスと建築家との関係性などの質疑が

フロアも含め討議された。

韓国側の発表では、桜が日本人の民族性を象徴するに至ったプロセス、大飯喰らいとされ、戦時期に鋤夫として徴用された朝鮮人労働者の実態を労務関係史資料から分析した発表に対して会場から多くの質問が寄せられた。また、日本文化の精髓とされる茶の湯について、時代の異なる3者を同じまな板に載せ分析した李教授の発表に対し、泉教授は『南方録』の資料としての妥当性をはじめ、発表と四つに組むコメントをされた。伊勢神宮の遷宮儀式を丁寧取材した朴教授の映像記録には日本の研究者にはない視点が処々に見られ参考になった。

桜や茶の湯など日本人の精神性の内面まで立ち入り、また日本側研究者の視角には入ってこない課題の設定など、一日ではあったが凝縮された内容であり、国際会議ならではの刺激を受けた。普通の人々が普通の人々の日常性を理解しようとの意思が研究者レベルにあってもここまで到達していることに安堵した。月並みな言葉になるが草の根の交流の実質化の必要を身に染みて感じた。センターはじめ、日本常民文化研究所、大学院歴史民俗資料科学研究科の韓国の関係機関との地味でもよい持続的な交流の進展に少しでも寄与できればと気持ちを新たにした。

また、国際会議の楽しみは、国内外の旧知の研究者との交流、新規の出会いである。今回は、神奈川大OBの富井正憲先生、中央大・朴銓烈先生、漢陽大・呉秀卿先生に久し振りに会えた。同宿の日本の異分野の若い研究者からは刺激を随分受けた。呉先生の研究室で一時の茶会は昔話に花が咲いた。その晩は、漢陽大学国際センター近くの焼き鳥屋で早期退職した主人の話に耳を傾けた。会議を中心に濃密な人との出会いの時間を過ごした。私も年を取ったものである。



韓国でも宮崎作品は人気がある